HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子ども臨床研究部門
Citation	子ども発達臨床研究, 8, 37-39
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61354
Type	other
File Information	83_Katsudohoukoku.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

子ども臨床研究部門

子ども臨床研究究では、学内外の研究者及び実践家向けて、子ども臨床にかかわるセミナーや研究会を行っている。また、臨床研究活動、臨床実践活動として、学校不適応や発達障害の子どもたちへのグループ活動、ディスレクシア相談及び支援を行っている。下記にその活動を報告する。

1．セミナー及び研究会

⑴ 発達臨床セミナー（WISC-Ⅳの技術者ワークショップ）

発達臨床において認知機能、知的機能のアセスメントは重要視されるものである。WISC-Ⅳなどのウェクスラー検査は、国際的に最も使用される検査の一つで、国内においても、教育・療育、医療、福祉領域などで頻繁に用いられている。最近の改訂では、コンプライアンスの重要性が強調され、検査を実施する側、検査を活用する側には、様々なルールが科せられるようになった。また、CHC 理論などの知能理論との整合性なども検討されるようになり、時代と共に専門性が高まってきている。検査を実施するもの、検査を支援や教育に活用するものは、こういった最新の情報やルールを意識し学ぶ必要がある。本セミナーでは、検査を実施、活用を行う教育実践家、心理臨床家、医療従事者向けに技術者講習会を設定した。

テーマ：WISC-Ⅳの技術者ワークショップ
　　── 実施法と採点・解釈法について ──
日　時：4 月 25 日（土）　9：30～16：30
場　所：北海道大学　文系共同講義棟 410 教室
対　象：特別支援教育にかかわる教員、発達臨床にかかわる心理士等
講　師：岡田智、桂野文良（潮見台小学校）、山下公司（北 9 条小学校）、田邊李江（教育学院）
参加人数：30 名
共　催：S.E.N.S 北海道支部

⑵ 発達臨床セミナー（支援に活かす心理アセスメント）

日々様々な心理検査が開発・販売される中、現場の支援者は限られた時間の中、何をどう学ぶべきか迷ってしまうのが実情である。現場支援者向けに、現在注目されている心理アセスメントについてエッセンスを学べる機会を企画した。より深く学ぶための入口として、本セミナー位置づく。

テーマ：支援に活かす心理アセスメント
日　時：12 月 5 日（土）　10：00～16：00
場　所：北海道大学　文系共同講義棟 410 教室
対　象：発達臨床にかかわる臨床心理士等
講　師：室橋春光（本学名誉教授）、安達潤（教育学研究院）、萩原拓（北海道教育大学）、岡田智、山本彩（札幌市自閉症・発達障害支援センターおがる）
参加人数：約 60 名
共　催：札幌市自閉症・発達障害支援センターおがる
内　容：1．主旨説明（山本　彩）
　　2．PARS：PDD　Autism　Society Japan Rating Scale（安達　潤）
　　3．学習障害（LD）支援に活かす心理アセスメント（室橋春光）
　　4．Vineland 適応行動尺度について（萩原　拓）
　　5．WISC-Ⅳの生態学的観点による解釈（岡田　智）
　　6．おわりに　～支援に活かす行動アセスメント～（山本　彩）

2．ディスレクシア支援室

これまで行われてきた「ディスレクシア相談」を「ディスレクシア支援室」と改め、臨床研究活動として位置づけた。本支援室での相談・支援活動は、医療機関等で既に診断を受けている事例を対象とし、研究協力への同意の下に行う。心理学

的諸検査を実施し、その結果に基づいた心理・教育的な改善方法を提案・実施することにより、ディスレクシアとその周辺疾患の認知心理学的背景の検討および支援方法の開発を目指している。スタッフは、関あゆみ、岩田みちる（研究員）、室橋春光（学外研究員）、橋本竜作（学外研究員）の4名である。

本年度の参加者（研究協力者）は小学2年生から中学2年生までの12名（新規5名／再来7名）であり、支援・相談回数はのべ69回（2月末時点）であった。

⑴　評価・支援の実践を通した学習障害児の支援におけるキーパーソンの育成

支援室で行う評価・支援およびカンファレンスに大学院生・研修生が参加することを通して、支援者となる人材を育てることを目的としている。大学院生の参加は「障害・臨床心理学総合講義（学習障害）」として位置づけている。

本年度の参加者は、大学院生8名、教育関係者2名、医療関係者3名、大学関係者1名であった。8月16〜17日には、子ども発達臨床研究センターを会場とし「ディスレクシア合宿」を行った。これは、支援室の活動に参加している親子を対象とし、子どもへの学習支援、保護者への情報提供、本人・保護者の交流を行うものである。大学院生が学習支援と交流活動を担当し、担当した子どもに関するケースレポートを提出した。

⑵　その他の研究活動

支援室での実践を踏まえて立案され、実施した研究は以下のとおりである。

①特異的言語障害のスクリーニング検査の作成（博報堂児童教育実践についての研究助成、平成27年度）（研究責任者：橋本竜作）

②音声のプロソディ知覚と読み能力の関連について（一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団、平成27年度）（研究責任者：岩田みちる）

⑶　アウトリーチ活動

支援室の活動に関連して行った学校等における研修、実践活動は以下のとおりである。

①RTIモデルを用いた平仮名音読指導（新篠津教育委員会、新篠津小学校）（関あゆみ）

②生徒指導実践研究会札幌支部　夏季研修会（2015年7月30日）
子どもの困り感に寄り添う支援〜学習の専門機関から〜（講師：岩田みちる）

③生徒指導実践研究会札幌支部　冬季研修会（2015年1月14日）
子どもの困り感に寄り添う支援方法の紹介（講師：岩田みちる）

3．高等学校教員養成における特別支援教育に関する基礎的調査とプログラム開発

ディスレクシア支援室（関あゆみ）、教職高度化部門（姫野完治・近藤健一郎）、特別支援教育担当教員（安達潤）により、教育学研究院の平成26年度研究推進特別経費により行った。一般大学における教員養成プログラムに特別支援教育に関する内容を組み込むことを目的とし、①北海道内の全高等学校・高等工業専門学校を対象とする特別支援教育に関する実態調査、②高等学校・高等工業専門学校教員を対象とする意識調査、③北海道大学の教職課程の学生・院生を対象とする意識調査、を行った。調査結果は教職高度化フォーラム（2016年3月10日）において、「高等学校における特別支援教育の実際と北大生の意識」として報告した。

4．発達障害の子どもを中心としたグループ活動（ほっこ）

2013年度は、学校不適応や発達障害などがある子どもたちを対象に、月1回の人間関係を育む遊びや造形活動をメインにしたプログラムを展開したが、2014年度は夏の3日間の集中プログラムを行った。2015年度は、月1回2時間程度のグループ活動を展開した（名称を北大コミュニケーションの教室（通称〝ほっこ〟）とした）。子どもたちが参加した本活動は、合計で18時間であった。個別的な支援ニーズや相談ニーズのあるケースに関しては、臨床心理発達相談室と連携し、相談室の

枠組みのもと支援及び相談を行ってもらった。参加した子どもは、小学校2年生から中学校2年生までの子ども10人であった。スタッフは岡田智、田邊李江（教育学院）、蒔苗詩歌（教育学院）、学生スタッフ8名である。学生・院生スタッフはケースカンファレンス及び活動の準備、スーパービジョンなどで、それぞれ約40時間を費やし、これらの時間は、「発達障害援助実習」及び「障害・臨床心理学研究総合講義（発達臨床論2015）」の授業の一部に位置づけられた。

5．発達障害の子どもを対象としたソーシャルスキル・グループ活動（SSG）

H 25、26年度のソーシャルスキル・グループ活動（通称〝SSG〞）は、自己感の発達及び情動処理スキルに焦点を当て、H 27年度「SSG」は中学生の子どもたちにヒディンカリキュラム（Miles et al., 2004）に焦点を当てたプログラムを実施し、適応能力と自己理解、自己表現の向上を目指してきた。参加者は、発達障害やそれに類する困難がある中学生7名であった。月1回、2時間、土曜日に実施された（年間22時間）。参加スタッフは、岡田智、田邊李江（教育学院）、萬谷きみ子（教育学院）の3名である。院生スタッフはケースカンファレンス及び活動の準備、スーパービジョンなどで、それぞれ約44時間を費やし、これらの時間は、「障害・臨床心理学研究総合講義（発達臨床論2015）」の授業の一部に位置づけられた。